

# 短大における地域研究としてのヨーロッパ論の 概要についての試案

檜 本 英 彦

明治以降、ヨーロッパは我が国に多くの知識と文明をもたらした。その文明や文化が本質的にどのようなものであるのか、またこれから我が国民はこのヨーロッパにどのように対応していくべきなのだろうか。またECが統合され、東欧が変化して行く時、日本とこれら諸国との相互の利益を促進し、世界の繁栄に寄与し得るようなやり方でこれらの諸国に対応して行くにはどのような知識と考え方が必要なのだろうか。この事はこれからの日本国民にとって大変大切な事である。

我が国では、ヨーロッパはあこがれの対象として、また師として考えられて来た。そして現今では「ヨーロッパからはもはや学ぶべきものは、何もない」と言った考えさえ見られるようになった。

本当に学ぶべきものは何もないのだろうか。単に情緒的にでなく、理性的で、客観的な見方でヨーロッパを見てゆくことが今後は大切である。ヨーロッパは我が国に今までその影響を与え、今後も影響を与え続けるであろう地域である。その文化の土台となったその成立や本質的なものを研究し、現在と今後の状況を正しく把握できるようにならなければならない。

そのために我が国の教育において正しいヨーロッパ観を養うように努める事は、国際人 (World citizen: 世界市民) の育成という点から大切な事であろう。この観点から短大でこの項目をどのような視点から扱ったらよいかという事について試案をまとめて見た。

## A. ヨーロッパを考える上での基本的観点

1. 「現代においては日本はもはやヨーロッパの影響を脱却したのだ」という考えは正しいだろうか。明治時代には煉瓦建ての「洋風」建築があったが今ではそれらは殆ど取り壊されたか、博物館的存在かである。しかし19世紀的なものだけがヨーロッパ的で、また、煉瓦建てだけがヨーロッパ建築で、またフロックコートだけがヨーロッパ風の衣服だろうか。

2. 我が国に対するヨーロッパの影響は、明治時代に初めて経験されたものだろうか。飛鳥・奈良時代 (この時代における関係は現在ヨーロッパとして理解されている地域のものとは違うが)、安土桃山時代、江戸全期間 (この間の関係は極限された地域との関係であった) において非継続的、部分的ではあったが経験されたものである。

3. 1868年に開国した時日本人が見た西洋は、高度に文明化した社会であった。当時の日本

## 櫛 本 英 彦

と、その差があまりに激しかったため、「西洋はずっと昔から高度に工業化した文明を持つ国々である」また「日本は文明的にずっと劣った国であったし、また、現在もそうである」といういわば錯覚に似た考えを日本人はずっと持ち続けて来たように思われる。

然し事実は、産業革命以前の西洋と当時の日本とは文明・文化度においてそう差異はなかった。また江戸時代における日本の教育普及率、識字率は同時代の西洋の国々のそれより劣ってはいなかったと言われている。

4. 現今実際にヨーロッパを見聞する人の数が増えたため、事情は違ってきて、「ヨーロッパはすべてに完全な理想的な所」と考える人は少なくなったが、しかしその過去の歴史的成長の過程に関してはやはり間違った考えを持っている場合が多い。

5. また反動的に「ヨーロッパからはもはや学ぶべきものはない」と言った考え方が出て来る。しかし実際には、我々の生活から、ヨーロッパから学んだものを取り去ったら果たしてどうなるであろうか。また今後も色々影響を受け続ける事であろう。

6. そしてこの「影響」というものが単に物質的なものについてだけではないという事を考えなければならない。

7. 今後我が国もヨーロッパに影響を与えていくであろう。その場合においてこそ我々の交渉の対象としてのヨーロッパについて正しい認識を持たなければならない。

8. 日本人は模倣の民だと言われる。しかしヨーロッパの歴史と文化の流れを見た場合いかに多くのもの模倣や学習を通じて獲得されて来たかという事を知る。文化は高い所から低い所へ流れるのは洋の東西を問わず同じであろう。

ギリシャ様式の建築、凱旋門等、外部的に目につくものだけでもこの事実はわかるであろう。また彼らがアラブ世界、東洋などから得たものが現代の日本人には彼らに固有の物であるという間違った考えで見られている場合がある。

9. 日本と外国との比較をする場合、相互の相対的關係を無視してしまう事がある。例えば「ある国民は保守的で、古い物が現代の生活にもそのまま使われている。しかし日本人はそうではない」と主張したとする。(この主張には是認の場合と、非難の場合とがありうる)

我々日本人は現在新幹線や自動車を利用し、家には電化製品がいっぱいある。この事実と同時に、我々は昔からの規格で造られた家屋に住み、碁や相撲を楽しんでいる。18世紀風の洋家具と和箆笥とは「古い」ことには変わりなく、明治時代の西洋伝来のランプよりも、我々日常の生活の周辺に見られる石灯籠のほうが「古い」のである。

従ってヨーロッパは古いとか、新しいとかいう論議には慎重でなければならない。

10. ヨーロッパ内のある国で、ある事実を見、経験した場合、その事実がその国だけに見られるものなのか、それとも、広く色んな国々に存在するのか、という事を考えて見なければならない。

例えば、たまたまAという国で子供の躰け方が厳しいということを目撃した場合、「Aという国では」ということが「Aという国だけで」とすり代わってしまいがちである。一方、ある

現象、ある事実は、ある国、またはある地域だけに見られる事なのかも知れない。

これらの事実を客観的に観察し、正しい事実を報告しなければならない。

11. 外国で見聞されるある現象に対して間違った価値判断、理由付けをしてしまう事がある。これはいわゆる「文化の干渉」によるもので、日本的な見地をあてはめて、ある現象を解釈しようとするので、見当違いの結論を付けてしまう事になる。

これを避けるためには色んな事柄の背景、相互関係、それを発生させている社会的歴史的な事情を正確に把握しなければならない。

12. ヨーロッパとアメリカとが混同される場合がある。またアメリカそのものを誤解的に把握し、それをヨーロッパに当てはめて考えるという事もあり得る。

これらの事柄に対する誤解は現今ではある程度減っていると思われる。しかしかなりの事柄についてまだ多くの混同がなされているのではないか。

勿論ヨーロッパとアメリカとは相互に影響しあっているので、この異同、影響の關係の事実を客観的にとらえる必要がある。

13. ヨーロッパというと我々は漠然としているが、ある一つのまとまったイメージを持つかも知れない。また1992年にE Cが総合され、ますます統一的な一つのものになって行くだろうと考えられるかも知れない。

しかしヨーロッパ人の中にはこの「統一」に反発し、ますます各国の独自性を主張して行こうと考え方も強い。

過去から現在にわたってヨーロッパはそれぞれの地域の独自性を発展させ、維持して来た。しかし同時にヨーロッパ全体が世界の他の地域とははっきり異なった独自性を持って来たのであり、そのような意味でヨーロッパは統一と分裂の二元性をもっていると言えよう。

## B. 各 論

### 1. どこをヨーロッパと言うか (1)

語には広い意味、狭い意味があるが、その広い意味においてアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド等ヨーロッパと呼ぶことが出来る。例えば東南アジアを越えオーストラリアに到着すると、そこにはヨーロッパ人が居てヨーロッパと似た生活をしている。

これらの国にヨーロッパがどのように発展し、またヨーロッパとの間にどのような相互關係があるか、という事はさらに派生的な問題であって、本論においてはいわゆる本来のヨーロッパを扱う。

### 2. どこをヨーロッパと言うか (2)

ウラル山脈の西がヨーロッパである。しかしギリシャ・ローマの文化の影響を直接、間接に受け、中世以来の発展を経過して来た所という意味において、現在のポーランド、チェコスロヴァキヤ、ハンガリーあたりまでがヨーロッパであると言える。

### 3. ヨーロッパの本質

檉 本 英 彦

ギリシャ・ローマの文化の影響を直接的に、または間接的に受けているという事はヨーロッパにとって本質的な事である。ローマ帝国の北方の境界であった、ライン河の西、ドナウ河の南、ブリテン島はローマ帝国の領域としてその直接的影響を受けた。

その境界外の世界にもローマの文明は強い影響力を及ぼした。

キリスト教はその中世の西ヨーロッパにおけるカトリック的統一において、また近世の分派においても、ヨーロッパをヨーロッパたらしめているものである。

#### 4. 区 分

ヨーロッパを西部ヨーロッパ、東部ヨーロッパに分けることができる。エルベ河以西、オーストリア、イタリア以西を西部ヨーロッパと概括することができる。これは偶然現在の政治区分と同じであるが、むしろ歴史的、民族的、文化的な分類である。

西部ヨーロッパは、ローマ文明の影響を強く受けたゲルマン人、ケルト人、地中海人種の世界であり、気候的に大西洋の影響を受ける。

北ヨーロッパ、南ヨーロッパに分けることができる。境界は、フランスの中央を東西に分かち、それとアルプス山脈とを結んだ線である。

また、北、中央、南に三区分することもできる。北緯45度と50度に挟まれた部分を中央ヨーロッパと概括することができる。

#### 5. 人 種、民 族

世界の多くの地域におけると同様にヨーロッパにおいて、人種と民族という関係は複雑である。また、これに言語という関係が加わってくるとさらに複雑になる。

広辞苑によると民族の定義は次の通りである。「同一の人種的並びに地域的起源を有し、また有すると信じ、歴史的運命および文化的伝統、特に言語を共通にする基礎的社会集団。人種、国民の範囲とは必ずしも一致しない」

人種的にゲルマン人であるポーランド国民でスラブ系の言語であるポーランド語を話す人であるかも知れない。また先祖をたどればゲルマン系であるが、フランス語を話すフランス国民であるかも知れない。イタリアの北部にはドイツ語を話す人たちがいるが、かれらは自分をイタリア人と考え、また公の場合にはイタリア語を使うであろう。

従って、フランス人はラテン民族、ドイツ人はゲルマン民族という風に単純に割り切ることはできない。又、各人種、民族においても雑多な混血が行われ、移住、亡命などによって、国籍の変更の起こっている場合もあることを考慮に入れなければならない。

ヨーロッパを構成する主な人種は、ギリシャ人、地中海人、ケルト人、ゲルマン人、スラブ人である。

地中海人はイタリア、スペイン、南フランスに、ケルト人はフランス、スイス、オーストリア、南ドイツ、ブリテン島西部、イタリアに居住する。ゲルマン人はスカンジナビア、イングランド、ドイツ、オランダ、フランス、スイス、オーストリア、北イタリアに、スラブ人はロシア、ポーランド、チェコスロヴァキア、ユーゴスラヴィア、東部ドイツ、オーストリア

に存在している。

フランス人、イタリア人、スペイン人等をラテン民族と呼び、ドイツ人をゲルマン民族と呼ぶのは、言語の分類を民族の分類に当てはめたのに過ぎず、また後者は英語の Germany という語から拡張解釈されたもので必ずしも客観性を持つものではない。

過去においても政治や宗教の理由からの移住や亡命があった。しかし近年において各国が労働力の補充やその他の理由で旧植民地、その他からの移住者を入国させた。

フランスにおけるアルジェリア人、ドイツのトルコ人、イギリスの西インド諸島人、旧アフリカ植民地からのインド、パキスタン人等である。

## 6. 言 語

ヨーロッパの言語には次のようなものがある。主としてインド・ヨーロッパ語族（インドやイランの言語もこの中に入る）の言語であるが、ウラル・アルタイ語族に属するフィンランド語、ハンガリー語がある。

ギリシャ語

ロマンス語（ラテン語から派生した諸言語）——イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語、フランス語

これらは相互に似かよっていて、例えばイタリア人とスペイン人とは各々自国語を用いて話しても会話が出来るという。ただしフランス語は他のロマンス語と異なった音韻を持っている。（スペイン人もイタリア人もフランス語は聞いても分からないという。ただし書かれた物、特に掲示などの意味は大体理解出来るという）

現代のフランスは民族移動の際、ゲルマン人であるフランク人の侵入によって建国された。したがって当時話されたラテン語の発音はゲルマン人の発音の影響を受け大きく変化した。フランス南部の発音はそれ程変化を被らなかったが、政治の中心が北部にあったため、北部の発音が標準発音として定着した。

ゲルマン語——スカンジナビア語、ドイツ語、オランダ語、英語

スカンジナビア語の一つであるアイスランド語はヨーロッパの言語の最も古い活用を現在も保っている。英語はスカンジナビア語との接触（9、10世紀のデンマーク人、ノルウェー人の侵入）などによってその屈折語尾の多くを失い、インド・ヨーロッパ語の本来の特質である屈折語よりも、中国語に似た孤立語の性質を持つに至った。

また1066年の Norman Conquest によって英国は英語と Norman French との二重言語の社会になったが、その後英語が復権した。しかしこの歴史的事実によって英語には多くのフランス語、またラテン語の単語が取り入れられる事となり、他のゲルマン諸語とはやや趣を異にした言語となった。

スラブ語——ロシア語、ポーランド語、チェコ語、ブルガリア語、セルボ・クロアチア語

ケルト語——独立した国民の言語としては現在用いられていない。しかしケルト人が住むアイルランド、ウェールズ、スコットランド、ブルターニュではこの言語の復権のための運動が

## 樫 本 英 彦

ある。イギリスのウェールズでは主として英語が用いられるが公の標識その他は Welsh, English の順の併記である。また Welsh 教育も行われ、放送も行われている。

なお言語と文字とは必ずしも一致はしていない。フィンランド語、ハンガリー語はローマ文字（ローマ字、ラテン文字）で書かれ、ポーランド語、チェコ語などのスラブ語もローマ字で書かれるが、ロシア語はロシア文字で書かれる。

## 7. 言語と民族と国家

ヨーロッパでは国境と言語とは必ずしも一致してはいない。ドイツ語はドイツ、オーストリア、スイス（東部）、ルクセンブルグ、フランス東部（アルサス）、イタリア北部で用いられる。そしてドイツ（西、東）、オーストリアでは公用語であり、スイスでは公用語の一つである。フランス、イタリアでは地域語である。

オランダ語はオランダ及びベルギー北半（ここではフラマン語と呼ばれている）で用いられ、ベルギーでは公用語の一つである。

フランス語はフランス、ベルギー、スイス、ルクセンブルグで用いられ、フランス以外の国では公用語の一つである。

スイス、ベルギー、のように二つ以上の公用語を持つ国がある。ドイツ語地域に生まれたスイス人は、自分の国語の一つであるフランス語を外国語のようにして学ばなければならない。そして多分英語も学習するであろう。

これらの複数言語の国には言語問題が困難な社会問題になる所もある。

## 8. 風 土

大陸の西端は緯度の割に気候が温暖である。アメリカ合衆国のオレゴン、ワシントン州は南サハリンと、我が国の北海道にあたり、またカナダのブリティッシュ・コロンビア州は北サハリンにあたるが、気候が温暖で、退職者年金生活の地として歓迎される程である。

スカンジナビア南部からドイツ北部、英国はカムチャツカ半島と北サハリンと同緯度である。また札幌はイタリアのフィレンツェよりやや南である。

古くは和辻哲郎の「風土」に紹介されたように、ヨーロッパは人間の居住の地として最も快適な地域の一つに数える事ができるであろう。西部程大西洋のメキシコ暖流の影響を受け、夏は摂氏18～25度、冬も零度前後である。東部に行くほど大陸性の気候となる。

雨量は年間、パリ、ロンドン600ミリ、ローマ650ミリである。（日本は1,100～3,000ミリ）従って水は不足はしないが決してあり余る程ではない。入浴の仕方が違う事もあって、ふる水は多くを用いず、また手を流し水で洗うのは我が国のやり方だと言われる。

英国では夏でも気温18～24度であるが、雨がよく降る。しかし一回の降雨時間は2、3分から10分、時に1、2時間、または午前だけ、午後だけという風である。また「乾いた雨」とでも呼べる感じの降り方である。

湿度の低さもヨーロッパの気候の特徴に挙げられる。これらの事実はその文化の保存性の良さ、つまり保守性、継続性とも深く関係している。

また適当な降雨と気温は牧畜に適している。

## 9. 地 形

アルプス地方とスカンジナビア半島の西寄りの部分とピレネー山脈を除いて人の活動を阻むような峻険な地形はない。またそれらの地域も交通を阻害するものではない。

フランス中部、ドイツ南部なども全般的に土地が高度であるだけで、人を寄つけない、高峻な地形ではない。従って広範囲にわたって居住、農耕が可能である。人口密度はオランダ357、西ドイツ246、イギリス230、スペイン77、スウェーデン19（日本322、アメリカ合衆国26）

ただし次の数字も考慮に入れなければならない。

全国土中の可住地帯における人口密度（1km 平方につき）

日本 1500人 西ドイツ 360 イギリス 260 アメリカ合衆国 50

また水門のある運河を設けることによって、船を内陸部に通す事ができる。北海や大西洋と、地中海や黒海とを船（細長い運河用の船）で結ぶ事ができ、産業の一つの動脈となっている。

土地は有効に使用できる。平地や斜面は耕作地。または緑の草地である。しかしこの草地は牛や羊が放牧されているか、その交替用の牧場であるか、または冬のための乾草の栽培がなされているのであって、その意味で土地は有効に使用されている。

我が国では平地に森林という事は比較的少ない。しかし平坦なヨーロッパにおいてかなりの面積が森林によって占められている。

主要国の森林面積の全国土に対する割合（%）は、フィンランド69、スウェーデン59、東・西ドイツ29、フランス27、イタリア22、イギリス9（日本67 ただし山林が主）

## 10. 国 土

日本は小さな国だ、との印象が一般に抱かれているようである。これはアメリカ、ソ連に対して言える事であるが、ヨーロッパの国々との比較では必ずしも当てはまらない。ヨーロッパはこのような「小さな」色々の独立国の集まりである。

国家の面積（単位千キロメートル平方）

フランス 552 スペイン 505 スウェーデン 441 日本 378

西ドイツ 249 東ドイツ108 両ドイツ合計 357 フィンランド 338

ノルウェー 324 ポーランド 313 イタリア 301 連合王国（イギリス） 244

## 11. 都 市

都市の発達は西洋史の重要な主題である。ロンドン、パリ、ケルン、ウィーンのようにローマ時代からの都市があり、又中世に諸侯の居所、教会などを中心として、また、地域の物資の集散の市場都市として発達したものがある。またヴェニスや北海沿岸のハンザ都市のように遠隔地との交易の中心であったものもある。ベルギーのブルージュのように中世に毛織物産地の中心として栄えたがその地域の産業の衰退のため影響力を失った都市は、いわゆる中世の美しさを残す都市である。

その他ルネッサンスや19世紀の産業革命が多く大都市を発達させた。

榎 本 英 彦

中世において多くの都市は城壁に囲まれていた。

城壁、またはその残存、または道路に変えられたもの、教会や公共建築物の壮麗さ、周辺の運河など、それぞれの都市の歴史を語るものは多い。

町の構造は、教会と広場 (Market place) を中心として四方に広がるという形態が多い。従って都市の構造にも広場が重んぜられ、もし理想的に都市計画をするならば、それらの広場から放射線状に四方にのびる道路が建設される事が多い。しかし実情は雑然とした道路がそのまま都市に組み込まれていった場合が多い。

しかし都市が大きくなるにつれ改造がなされる事があり、道路が広く、真っすぐにされ、所々に広場が造られる。

また、イギリスのエジンバラの一部、ベリー・セント・エドマンズ、ドイツのマンハイムのように最初から計画的に碁盤目状の道路が造られる事もある。しかしこの場合でも所々に広場が造られる。

この広場と言う観念は我が国にはなく、ヨーロッパの広場は我が国においては、「公園」と呼んでいる程度のもも入る広さであり、樹木と芝生の緑地であるものや、舗装されていて所々に噴水や彫像のあるものもある。そして中小都市においてはこの広場は文字通りマーケットであって、週の一定の日、又は毎日、市が開かれる。

イタリア人、フランス人などの南ヨーロッパ人は都市の建設が得意だといわれる。広場を中心に壮麗な都市を建設する。彼らの生活が都市と、時には戸外を中心としている事がこれと関係があるといわれる。

英国人は歴史的にも精神的にも田園を基盤とする国民である。英国の都市は農村の延長であると言われ、ロンドンは「村の集まり」であると言われる。ロンドンにはパリのような統一された壮麗さはない。事実、ロンドンの大通りから一步入ると、地方の小都市や、村のような景観に出くわす事があり、またどこでも樹木が鬱蒼としているのが目に入らない所はあまりない。また広大な公園が幾つも都心部にある。

都市の人口一人あたりの公園の面積は次の通りである (平方メートル)

ストックホルム	80	ボン	37	ロンドン	30	アムステルダム	19
ローマ	12	パリ	8	東京	2		

ヨーロッパの都市には自治都市として発達したものが多く、西ドイツのハンブルグやブレーメンは現在も独立した「国家」(連邦を構成する州の一つ)である。

ヨーロッパの都市はごく一部の例外(産業革命時代に一つの理念をもって造られた町や戦後のニュータウン)を除いて、自然発達したものである。19世紀に一部の大改造を経たものもある。しかし概して道路は狭く、曲がっているものが多い。

古い都市は現代の要請に基づいて再開発されなければならない。もしその都市が観光的価値を持つと同時に、現代の機能を果たす事を要求される都市ならば、大変矛盾した状況に直面せざるを得ない。この場合、都心部そのものに新しい建物を建造してゆくやり方(日本はこのや



り方が多い) と、郊外に新しい都市を建設して行くやり方とある。

パリのデファンス (Défense) 地区は市の北西部に建設された新しい現代都市である。

ロンドン東部のテムズ河沿いのドック地帯はかつては港湾として繁栄した。しかし運送方法の変化にともなう港としての機能を失い一時荒廃するにまかせられていた。現在この地はドックランズ (Docklands) の名称のもとに開発されつつある。鉄道が敷設され、また小型の空港も造られている。

都市の新しい建築の中にはかなり斬新なものもある。特に新しく開発された地域において超現代的なものもある。しかし古い建物群のなかに建設されるものは、周囲との調和を考えたものが多い。また古い建物を外側はそのままにして、内部を近代的に改装するという事の行われている場合が多い。

日本では「何々町」と言うのが、町または市の分割単位になっている。というよりも家の集合体としての「町」が一つの地域をなし、それが都市の構成の基本となっている。また特に過去においては神社がその中核をなし、時に住民の生活や思想、行動をも規制した。

ヨーロッパの都市は道路と広場とを基本として構成されている。それは「風通しの良い」社会であり、各々の家の面する道路は全世界に通じていると言ってもよい。

## 12. 政 治

西ドイツ、スイスは連邦であり、この点アメリカ合衆国と同様の政治形態を持っていると見てよい。イギリス、オランダ、ベルギー、ノルウェー、スウェーデン、デンマークは王国であり、スペインも最近王政が復活された。ルクセンブルグは大公国、モナコ、リヒテンシュタインは公国である。

これらの君主国はすべて実質的には共和国と違わない政治が行われている。しかし世界で最も民主的な国々が君主制である事は注目に値する。

## 13. 法 律

イギリス法といわゆる大陸法があり、後者は更にフランス法とドイツ法とに分類される。ローマ法はむしろイギリス法に似た経験法であった。しかしこれがドイツにおいて体系化され、ゲルマンの固有法と断絶した法体系を持つに至ったのがドイツ法である。明治初年において急速に法体系を整備する必要があった我が国において、経験的イギリス法の理解と導入は困難であり、我が国の法体系はドイツ法の影響を強く受けた。

それに反しイギリス法は固有のゲルマン法の継続であり、帰納的で、経験的な発想に基づく先例法である。権力をも拘束するものとしての「法の支配」等の考えがあるが、あまり専門的な点に触れることは困難であろう。

## 14. 産 業

歴史的発展を研究すると同時に、現在の状況、また今後の発展傾向についての概略的研究が必要であろう。ヨーロッパは産業革命以来高度の産業社会を形成して来た。しかし同時にヨーロッパの多くの国は高度の集約性を持った農業国でもある。

榎 本 英 彦

例えば各国の食用穀物の自給度を見ると、1985年において、(%)

イギリス 105 西ドイツ 97 フランス 223 イタリア 83である (日本は67)

## 15. 交 通

上述のように土地が比較的平坦であり、河川も運河の建設とあいまって、運行に適しているため、移動交通が比較的便利である。

ヨーロッパ人が模範としたローマ文明の大きな特徴の一つは、各地を結ぶ道路の建設である。産業革命以前の道路は決して良い状態であったとは言えないが、ともかく鉄道以前においてヨーロッパに馬車の広範囲な使用があった事は注目に値する。

これは現在において各地を結ぶバス交通にとって代わられている。

鉄道は一時斜陽産業と見られた事があった。しかしその後、合理化と高速化が可能になるにつれ、各国とも鉄道に対する関心が高まった。

まずイギリスで主要都市を頻繁に結ぶ列車 Inter-city が実施され成功をおさめ、各国に普及した。また日本の新幹線の成功に刺激されたフランスの TGV が成功し、他の国々もこれに匹敵するものを計画、または実施中である。

高速化によって昼間の内にヨーロッパの主要都市を鉄道で行き来する事が出来るようになり、飛行機に対して対抗できる可能性があり、ヨーロッパ域内での交通は飛行機と鉄道との両立が可能である。

かつての高速鉄道網である TEE は現在では、Eurocity の鉄道網にとって代わられている。またフランスの TGV は地中海方面だけでなくスイス、大西洋岸の方面に延長され、さらに英仏海峡のトンネルが開通する1993年には高速鉄道でフランス、イギリスが結ばれる事となる。

英国を除く他の国は右側交通である。しかし鉄道だけは例外がある。すなわちフランス、ベルギー、スイスでは鉄道は左側を進行する。右側進行のドイツ、オランダなどは国境駅で進行の側を変える。

都市の交通はバスが主体である場合が多い。いわゆるワンマンが殆どである。また乗客が少ない路線では十数人乗りの小型バス (Minibus—日本でマイクロバスと言っているもの) が運行されている場合がよくあり、また過疎地には郵便配達と乗客の輸送を兼ねたポストバスが運行されている所もあるという。

オランダ、デンマークのように土地が平坦で自転車が多く使われる所では、道路の車道と歩道の上に自転車専用の道が設けられている所があり、また自転車置場が適当な場所に設置されている。

市街地における混雑緩和の問題はどこの国においても重要な問題である。都市内外に目立たないように自動車専用道路を敷設することと並んで、地下鉄の建設、延長、更に路面電車の維持がはかられている所もある。特に大陸の国においては、路面電車がかなり広範囲に用いられ、騒音の少ないタイヤが使用され、また一部は地下路線となっている。

また建設価格の少ない軽鉄道の建設が計画され、また考慮の対象となっている。

高速自動車道が発達、普及している事は、いうまでもない。

## 16. 生 活

石造りの住宅が多いこともあり住宅の耐用年数は長く、現在でも17、18世紀の建物が現に使用されている。現在も新しい住宅が建設されつつあるが、一般にその外装、室内装飾は保守的である。近代的な設備が普及して居ることは事実であるが、外見上はできるだけ保守的に保とうとするのが一般庶民の感覚である。

暖炉に石炭をたく暖房は、環境の保全のために禁止されている地区が多い。また当然近代的な電気やガスによる暖房が選ばれる。従って住宅の外観が変化して来ている。屋根に煙突の立った住宅は極めてヨーロッパ的なものであるが、新しい住宅は煙突がなく、煙突のない住宅が並ぶ住宅団地はやや異質な風景である。しかしこれはやがてありふれた光景になる事であろう。

ヨーロッパの住宅や一般の建物のドアは全く日本のそれらとは異質のものである。ヨーロッパ人の心性はこのドアの感覚が理解されなければ分からないとさえ言われる。

それらはズシリと重く、がっしりと閉まる。また鍵は確実である。ヨーロッパ（アメリカもそうだが）には自動ドアはあまり普及していない。これは文明度の問題ではなく、心性の違いから来ている。

ヨーロッパ人にとってふろは日本人における程生活に密着したものではない。ヨーロッパの住宅が浴室を独立に持つようになったのは近世の事であるし、またトイレに関しても歴史的に考察すると興味のある主題である。下水の設備が完備して来たのもようやく19世紀においてである。

麦とぶどう酒が古くからヨーロッパ文明の食の基本であった。しかし北ヨーロッパはビール圏であり、イギリス、ドイツ、スカンジナビアでは庶民の飲み物はビールである。

牧畜文化に伴い、肉食が一般的であるが、はたして庶民は昔から十分な肉の食事をして来たであろうか。外国の事は公式化して考え、また現在だけを見て、歴史的に見る事をせず、また我々が「洋食」と考えているものを基準にして考える結果、ヨーロッパ人の食事について間違った判断をしてしまう可能性がある。

タラ、ヒラメ、サケ、マス、エビ、ニシンなどの魚もよく食べられる。また現在牛肉などの健康に対する影響が反省されつつあり、食事の内容の変化も起こりつつあるといわれる。

古来のヨーロッパの食事に加え、近代において、じゃがいも、とうもろこし、茶、コーヒー、ココアなどの食物、飲料がアメリカ大陸、アジアなどから導入され、それらはあたかも本来のヨーロッパの食物、飲料であるのかのように用いられている。じゃがいもはヨーロッパの食事において澱粉質の主要な供給源である。

しかしこれに加え、最近において新しい食物が世界各地から紹介されて、マーケットで手軽に手に入り、日常に用いられるようになった。たとえば大型のなす、大根、キーウィなどである。日本人がじゃがいもを用いるのと同じ感じで米が用いられる。ただしこれは long grain と

榎 本 英 彦

呼ばれる、長めで粘着性の少ない種類の米である。

ヨーロッパの食事の作法は国によってやや異なる。また昔からナイフやフォークが使われていたわけではない。この点でも習慣は歴史的に形成されて来たのだという事に注目する必要がある。

温暖地帯であるから衣服は特別なものは必要としない。日本人が衣替えの思想を今だに持っているのにひきかえ、ヨーロッパ人にはこの思想と習慣はないと言ってよい。ヨーロッパの北部、フランス、ドイツ中部以北、イギリス、スカンジナビアにおいては夏でも日本の合服、もしくは冬服が適当である場合が多い。またこれらの地域でも26、7度になる事があり、一日の内に気温が変化する事がよくあるから、服装の調節は気温に応じてなされる。また個人差があるから一律の変化という事は考えられない。また子供の時から気温や時と場合に応じて自分の衣服を調節する習慣が植え付けられている。

制服は日本だけのものだという事はない。公共機関の職員は勿論、一般の商店、デパート等でも店員、職員が制服を着用している場合がよくある。また特にイギリスにおいては学校で制服が制定されている場合が多い。その理由は日本の場合とよく似ていて、「親に服装の心配をかけない、服装上の競争心を抑制する」といったことである。

ヨーロッパの服装の歴史は興味のある主題である。しかしこれは殆ど独立した主題だと言ってよい。

ファッションに関する色んな事実にもかかわらず、一般の人々の服装は実用的で、質実なものである。

## 17. 宗 教

キリスト教が中心である。日本においては仏教渡来以前の民族宗教は仏教が普及して後も仏教と併立して存在を続けている。ヨーロッパにおいてはキリスト教以前の宗教であるギリシャ、ローマの神々や、ゲルマン神話の神々は今では神話の世界に残るだけである。

現在エキュメニカル（教派統一）の運動は盛んである。しかしキリスト教は仏教と同様に多くの教派に分かれてるのが現状である。

最初の分派は11世紀における西方教会と東方教会の分裂である。東方教会は日本では正式には東方正教会と呼ばれ、主としてバルカン半島諸国とロシアに行われる。

西方教会は宗教革命時にローマ・カトリック教会とプロテスタント教会に分かれた。

前者はイタリア、スペイン、ポルトガル、フランス、ポーランドに多いが、オーストリアにも多く、またドイツ、スイス、オランダのキリスト教信者の半数はローマ・カトリック教徒である。

ドイツのマルチン・ルーテルによる教会の革命はルーテル教会を生んだ。この教派はやや保守的となり、ドイツ、スカンジナビア諸国に信者が多い。

スイスで活躍したフランス人カルヴァンの改革は長老派、改革派を生み更に多くの分派を生じさせた。これは特にアメリカ合衆国で著しい。この派はスイス、オランダ、スコットランド

に多くの信者を持つ。

イングランドではその教会は宗教改革の時、ローマ教皇から絶縁し、プロテスタント教会となった。しかし典礼、教会制度の点では初期教会の伝統を維持し、他のプロテスタント教会とはやや異なった英国国教会（聖公会）を形成した。

現在のヨーロッパでキリスト教の勢力は以前よりも弱くなったといわれる。しかし社会においてキリスト教の影響力は依然として強く、また一般の人々の思想や行動を規定するのはキリスト教的考え方である。人々は神と教会を畏敬し、ひとたび教会に入ると静粛にし、神に対する尊敬の態度を失わない。

### 18. 教育、子供に対する態度

ヨーロッパで近代的な教育制度がはじめて整えられたのは19世紀の中頃であった。それまでは上流階級の子弟に対して私的な教育がなされていた。

フランスのリセ、ドイツのギムナジウム、イギリスのパブリック・スクール、グラマー・スクールといった各国の中等教育の伝統がある。しかしこれらの国々においても、教育の現代化が叫ばれ、多くの改革がなされつつある。例えばイギリスのパブリック・スクールも古典教育だけが重視されるのではなく、現代的な科学、技術教育が重視されているという。

ヨーロッパにおける最古の大学は1088年に創立されたイタリアのボローニア大学であると言われる。その後12世紀前半にパリ、オックスフォードの両大学が創設された。現在ヨーロッパでの大学進学率は日本における程多くはない。高等教育機関進学率は次の通りである。

イギリス	22.9 (1985年)
ドイツ	28.1 (1985年)
フランス	31.9 (1986年)
日本	36.9 (1987年)

「幼児は理性が十分に発達していないから、幼い時に習慣的になるよう社会道徳をしつけてゆく」というのがヨーロッパ人の子供の教育に対する根本的な発想である。これは時として幼い子供に対して厳し過ぎるという印象を与えるかもしれない。しかしそれはよく言われるように、子供と理性のない動物とを混同しているのではなく、根本に子供に対する愛情があつての事であり、子供を社会に適応し、一人立ちできるようにするためである。

ヨーロッパの社会はルール違反や、個人の恣意に対して寛容な社会ではない。この社会にやがて入って行くように子供を準備（教育）しなければならない。また小さい時に、したいままの、我がままで育て、大きくなってから説得でこれを教育する事はいかに困難であるか、という事を知っているので、幼い時に習慣として身に付く躰を彼らは重んじるのである。またヨーロッパは自立した人間の集団であるから、自立と自律の人間に育て、社会性と友愛の精神を培う事が教育の中心である。

### 19. 女性の地位

ヨーロッパでは女性の地位が高い事はいうまでもない。中世以来の騎士道の伝統があり、我

檉 本 英 彦

が国より女性に対して高い配慮がなされ来た。しかし女性が社会的に地位を獲得してきたのは19世紀以後の事であり、それ以前における状態は、文学や歴史を読めば、必ずしも現在のような地位が与えられていたわけではない事が分かる。

例えば男女が別々に扱われたり、若い女性は一人では外出できないとか、結婚は親によって決められるといった事である。この点で欧米人自身が、欧米ではずっと昔から女性の地位が高く、日本ではその反対だと主張する人がある。日本はこの点で欧米より何年か遅れてきたというだけではないだろうか。

現在ヨーロッパで女性はあらゆる分野に進出している。男女の雇用上の差別は法律によって禁止されている。しかしこの事は同時に、従来は男性がしていたような肉体的にきつい労働にも女性がつく、という事を意味している。

## 20. 民 族 性

ヨーロッパ人の基本的性格は個人主義 (Individualism) だという事が出来る。しかしこれは利己主義という事とは関係はない。我が国民が仮に集団主義だとしても、集団主義者の中にも利己主義の人はいるし、個人主義の人の中にも利己主義者はいる。

自分が自立した自律的人間であるように、他人も自立した自律的人間だという前提に立つのが個人主義であろう。それで他人に働きかける時には、こちらから決定したものを親切のベールの下に相手に干渉的に提供し、相手も「せっかくだから」という発想で自分が本来好むものであるかのようにそれを受け入れる、という人間関係ではない。

他人の意思を確かめ (それには各自が自分の意思を持っているという前提がある)、その上で相手を help する、という人間関係である。

各自が自由な意思を持った人間の集まりである。従ってすべての人々に関係することはルールの設定がなされなければならない、そのルールに違反すればそれ相応の罰を覚悟しなければならない。しかしこれは個人のプライバシーが他人の「目」によって縛られているという事ではない。

従って自由な人間が合理的な相互関係によって結んだ契約、ひいては社会のルールを守る事が信頼できる個人として第一に要求される。

また各自が持つ自由の観念は単なる恣意、勝手とは異なっている。それは本来すべての人間に共通の真理に基づいた客観性を指向するものであり、その最終的基準としては絶対者である「神」が存在している。

他人の自由を侵さない限り各自が自分自身である自由は最大限に守られる。これらの自由を侵すどんな社会思想、政治形態に対してもヨーロッパ人は生命を賭けても戦うだろう。

また自由な社会とは各自の恣意によって揺れ動く社会ではない。各人が神からの自由を与えられた個人であると同時に、神の法としての正義 (justice) が社会関係の基準として存在する。

各個人と個人の関係が恣意でないならば、「すべての人に共通なもの」に頼らなければならない。これは論理であり、合理性である。つまり「言葉で以て説明がつく」という事でなければ

ばならない。ヨーロッパ人の言語は明確であり、必要にして十分なことを言葉で言い表すのが彼らの人間関係である。

日本人の言語生活は「以心伝心」で、これは日本人が同質的な国民だからだという説がある。しかしヨーロッパでもかなり同質的な国民があり、世界の中でも同質度が強い社会であればある程、以心伝心の度合いが高まるという事実が観察されるものであろうか。

相手の心を読んだつもりの表現は、実はその確率が二分の一でしか当たってはいないのではないだろうか。しかしその「相手」の人が「せっかくだから」という遠慮で発言者の意向に合わせるならば、その確率は一見100パーセント当たっているかのように見える。

発言を受けた「相手」の人が発言者に合わせるという前提があつてはじめて、以心伝心が成立しているように見えるのではないだろうか。また発言者が言語に対して緩い見方をするため、十分規定されない表現、必要にして十分ではない表現をし、それを受ける相手もそれを許容して「適当に」反応するので一見以心伝心が成立しているように見えるのかもしれない。

以心伝心は従って二分の一の確率でしか成立しないのである。

我々がヨーロッパ人に対する時は彼らの持つ自由と、契約としての社会秩序の観念をよく心に留めておかなければならない。同時に言葉が事実と密着した意味を持つような表現をもって彼らに対さなければならぬ。

またルールと社会の契約や常識に反した事でも、熱心にやっているという理由で「せっかくやっているのだから」と大目に見られ、譲歩されるという社会ではない。従ってこちらも説明のつく基準を持ち、さらには、キリスト教的な友愛と社会貢献の発想をもって初めてヨーロッパ人を理解する事が可能である。

一般的なレベルでいうならば、日本人とヨーロッパ人との違いは次のように言えるかも知れない。日本人は自分がその際属する集団内においては普通の社会関係をもって振る舞う事が出来るけれども、その集団以外の人に対しては全く無関係の態度をとる。もしくはなんらかの関係を持つ事を自己の集団に対する罪悪のようにして恐れる。集団以外の人との関係を始めるには、名刺の交換、相互の知人に対する言及等、一定のプロセスが必要である。

また個人としての意思決定は自分の属する集団のそれと相反する可能性があるので、自分の意思や意見はいつも保留にし、非人称にしておかなければならない。しかし集団として決定された意思は強く、時には変更が大変困難である。

ヨーロッパ人は未知の人に対しても一対一の関係で、いわば you と I との関係で対する事が出来る。また個人の意見は、あくまでも I think - といったように、主観と客観との分離でなされるので、だれでも自分の主観としての意見を明確に表現する事が出来、同時に客観を客観として受け入れる事ができる。

この個人と集団、又未知の人に対する関係において、また人称による思考において日本人とヨーロッパ人との違いが大きく表れてくるように思われる。

我々は彼らヨーロッパ人についてのこの事実をよく知る必要があるが、これは何よりも彼ら

梶 本 英 彦

の言語を通じその思考法を学ぶ事によって可能である。

各国民の性格については、色々言われている。例えばフランス人は理性的である。ドイツ人は哲学的、観念的である、イギリス人は实际的である、等である。これらは確かに歴史の中で証明されている事であり、正しいであろう。この事についてあまりに公式的な概括論をする事は時として危険であるが、やはり一般的な国民的傾向というものは観察する事ができるであろう。

同時に、日常的な事柄に表れた各国民の傾向、また我が国民との違いという事は、副次的なことではあるが興味のある事である。

自動車で行き来する人、また都市で場所をさがす人が一様にいう事は、我が国での難しさに比べ、ヨーロッパでは掲示や道路標識、都市の道路、ハウスマンバーの指示が明確で一貫性があり、指示通りに従えば行動が容易である、という事である。

これは独立した判断をする個人が他人の世話にたよらないで行動する、という社会通念に基づいているのかも知れない。また彼らの言語が緻密で正確であるように、言語行動の一部である指示や掲示が一貫性がある、正確であるのだとも言える。

イギリスでは人々は順番を待つのに列 (queue) を作る。これは単なる社会道徳であると同時に、列を作りこれを守る事によって最も速く、摩擦を少なくして人々が行動出来るという実際的経験の知恵から来ていると言われている。

同じ事務をやっている幾つかの窓口 (女性のトイレもこれと同じだと聞いているが) に多くの人が赴く場合、個々の窓口に思い思いに人々が並ぶのではなく、少し離れた所に一列になって人々が並ぶ。そして一番先頭の人が空いた窓口へ行くというやり方である。これは順序よく焦らないで人々が行動出来る方法であり、「先に来た人が先に」 (First come, first served) という社会的公正さ (fairness) の原則の表れでもある。

大陸の国々では列車の時刻表は一日の初めから順番に書かれ、また各列車には途中の停車駅がすべて書き記されている。イギリスでは駅に掲示されている時刻表は、旅客の行くであろう駅の名前が全てアルファベット順に記されている。そしてその各駅名の下に、そこへ行くために乗るべき列車と、その出発時間が、その列車の終点、途中停車駅と共に記されている。

旅客はどこかへ行きたいのであり、彼が知りたいのは全体の時刻表ではなく、自分の行きたいと思う駅へ行く列車の事である。従ってこのイギリス式のやり方は極めて实际的、合目的なやり方であると言える。

ドイツの駅のプラットフォームには各列車の編成を載せた掲示板があり、これを見れば自分の乗りたい車両はどこで待てばよいか分かる。

またイギリスの地下鉄のプラットフォームには、その線のその駅以後の路線図しか書かれない。その駅以前の駅名はそこで乗る乗客には不用であるし、またこの駅以後の路線図を見る事によって自分が目指す間違いのないプラットフォームに出た事を知る事ができる。

パリの地下鉄メトロもそれ独自の合理的方式を持っており、それはスペイン、ポルトガルな



どのいわゆるラテン諸国でそのまま採用されている。それは一定の原則による指示に従えば迷う事なく自分の出たいプラットフォームに出たり、乗り換えたりする事が出来るシステムであり、乗客は途中で不明確な、また不足した指示のために適当な推測を働かせなくてもよいシステムである。

以上の例は自分が相手に伝えなければならない事を正確に過不足なく伝えようとするヨーロッパ人の言語観に相応するものである。

これらの具体的な文化事象は数え挙げればきりはなく、また観察者の目に止まらないものも多い。これらは文化論において本質的な、中心的な問題ではないが、明確に文化を表している興味のある事柄であって、これらを観察し、理解する事によって、文化の本質的なものの理解を助ける事ができる。

### C. 各 国 論

各国についての概要、歴史、生活、国民性などが論じられなければならない。今回はこれについては省略する。

\* \* \*

現在ヨーロッパの国々の国境は厳然と存在し、管理されている。オランダ、ベルギー、ルクセンブルグのいわゆるベネルックス三国のように国境の通過が緩められている例もある。しかし一般に出入国は厳重に管理されている。

また国境を一步越えると、はっきりした雰囲気の違いがあり、ドイツとオーストリア、ドイツとドイツ語圏スイスであってさえも、国境を越えると風物、国民性において微妙な違いを経験する。この違いは個性として大切なものであり、このような個性を尊重する事こそ真にヨーロッパ的な特質である。

しかしヨーロッパはどこへ行っても、他のどこの文化とも違うヨーロッパ的なものは共通して存在し、かつそれはアメリカ、オーストラリアのようにヨーロッパ人が移住した所はいうに及ばず、その他の地域においても明確な刻印を押すかのような形で存在している。

ヨーロッパは「多様にして統一がある」と同時に「統一があるが多様である」社会である。今後この社会がどう成長して行くかという事は単に興味がある問題であるだけでなく、我が国の今後にとっても重大な関心のある事柄である。1992年の EC の統合がどのような変化をこの地域にもたらすかという大きな問題がある。また今後東欧が政治的にどのように変化して行くかという事は予断を許さないが、この成り行きはヨーロッパ全体にとっても大きな影響のある事柄である。

これらの事を正しく把握するためには、ヨーロッパ全体と、個々の国々に関して、その過去と現在、更に現在の変化について正確に観察し、事実を的確に知る事が大切である。

櫻 本 英 彦

参 考 文 献

- 日本国勢図会 (1989年) 矢野一郎監修 国勢社  
 ヨーロッパ人 ルイジ・バルジーニ、浅井泰範訳 1986 みすず書房  
 民族の心 アンドレ・ジグフリード、福永英二訳 1953 ダヴィッド社  
 情熱と構造 マダリアーガ、佐々木孝訳 1985 れんが書房新社  
 薔薇と十字架 マダリアーガ、上原和夫訳 1956 みすず書房  
 フランス人とフランス人 アンドレ・モーロア、松尾邦之助訳 1957 岩波書店  
 フランス人とイギリス人 リチャード・フェイバー、北条文緒・大島真木訳 1987 法政大学出版局  
 樫の木 オフチェニコフ、中川研一訳 1981 サイマル出版会  
 ヨーロッパの心 ピーター・ミルワード、安西徹雄訳 1981 三省堂  
 風土 和辻哲郎 1935 岩波書店  
 西洋の事情と思想 新渡部稲造 1983 (学術文庫) 講談社  
 ヨーロッパからの発想 木村尚三郎 1978 講談社  
 ヨーロッパからの窓から 木村尚三郎 1988 講談社  
 西欧文明の原像 木村尚三郎 1974 講談社  
 ヨーロッパ文明の原型 (民族の世界史 8) 井上幸治 (編) 1985 山川出版社  
 ヨーロッパの個人主義 西尾幹二 1969 講談社  
 ヨーロッパとは何か 増田四郎 1967 岩波書店  
 日本人の発想・西洋人の発想 加藤英明 1977 講談社  
 空とイギリス人 佐藤信弘 1988 サイマル出版会  
 フランス式エリート育成法 八幡和郎 1984 中央公論社  
 自由と規律 池田 潔 1949 岩波書店  
 イギリスの学校生活 清水正昭 1986 サイマル出版会  
 フラン文化論 クルチウス、大野俊一訳 1977 みすず書房  
 ドイツ語とドイツ人氣質 小塩 節 1988 講談社  
 ラ・フランス 谷岡武雄 1989 古今書院  
 ヨーロッパを織る 和田 俊 1988 中央公論社  
 ヨーロッパ・二つの窓 加藤周一、堀田善衛 1986 リプロポート  
 地下鉄の文化史 中川浩一 1984 筑摩書房  
 文久二年のヨーロッパ報告 宮永 孝 1989 新潮社  
 西洋企業の発想と行動 吉森 賢 1979 ダイヤモンド社  
 ものの見方について 笠 信太郎 1957 角川書店  
 甘えの構造 土井健郎 1971 弘文社  
 人と人との間 木村 敏 1972 弘文社  
 キリスト教の原流 石原 謙 1972 岩波書店  
 キリスト教の展開 石原 謙 1972 岩波書店  
 キリスト教史 藤代泰三 1979 YMCA 出版  
 西洋教会史 小嶋 潤 1986 刀水書房  
 ピューリタン 大木英夫 1968 中央公論社  
 英米法 伊藤正己、田島 裕 1985 筑摩書房  
 英米法概説 田中和夫 1971 有斐閣  
 英国社会史 (上下) 今井登志喜 1953 東京大学出版会  
 英語史 ボー、ケイブル、永嶋大典他訳 1981 研究社  
 ヨーロッパの言語 泉井久之助 1968 岩波書店